

東日本大震災被災地応援実行委員会より

轍 わだち

2011.6.20 NO21

実行委員会からのお願い

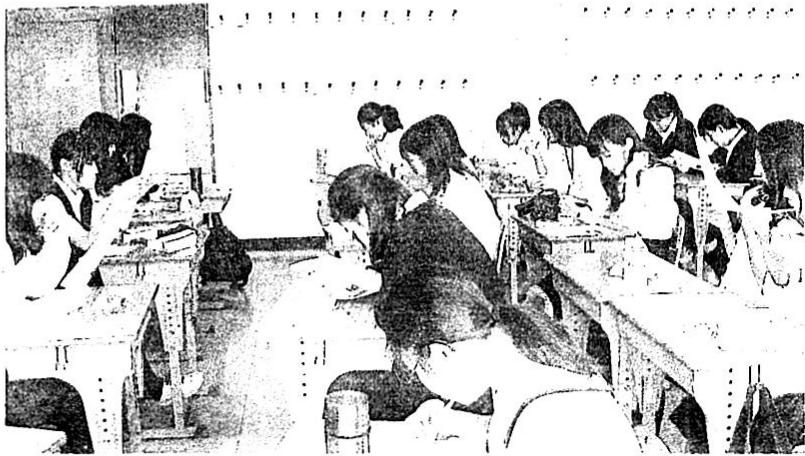
6月18日（土）は震災から100日目でした。

まだ100日しかたっていないのだから…

もう100日もたっているのに…

復興は… 支援は…

どこまで進んでいるのだろうか？



私たち実行委員会は、立ち上げたときから

「息の長い支援」を

行う決意ではじめています。

450枚作ったオリジナルタオルも

完売できました！感謝・感謝・感謝

そこで、本日昼休みに実行委員会を開き、次の事を話し合い決定しました。

**新デザインで引き続きタオルを作り
募金を増やして、冬に向けての支援物資を送る！**

そこでデザインを募集します

フェイスタオルとハンドタオルの2種類です

皆さんからの素敵なデザインをお待ちしています



現在イングリッシュシャワーで、
高校生が使用している英字新聞
[Catch a Wave]に掲載されました。

被災された方々が心から笑える日が1日でも早く
来ることを祈りながら、私たちは支援活動をして
います。

京都府 平安女学院中学校高等学校
東日本大震災被災地応援実行委員会のみなさん

デザイン応募用紙
締切：6月25日

ここから下を切り玄関に設置した箱に入れて下さい
いくつもデザインしたい人は別紙に書いて下さい。

大はフェイスタオル

小はハンドタオル

年 齢 保 護 者 も 可

名前

東日本大震災のために募金する人たち
=3月15日、ソウル(共同)



東日本大震災は、韓国社会にも大きな衝撃を与えた。震災の様子はリアルタイムで韓国でも報道され、私も韓国から、安否を確認する電話やメールがひっきりなしに送られてきた。

激励は個人単位だけではない。釜浦空港では震災後案内員が「がんばれ日本」と日本語で書かれたタスキをつけ仕事をしていた。職場や教会、学校などでも、日本の復興を助けようと募金活動が行われた。1997年の通貨危機の時にも使われなかつた救世軍の「救世錆」がソウルの繁華街・明洞の町に登場、小さな子供が募金に駆けつける姿がテレビでも取り上げられた。

妻の出産で一時帰国することになった日本人男性には、友人や同僚から非常食やベビー用品、高麗にんじんが山のように届けられ、多くの皆日本語に関心がある

海外文化通信

韓国

わけではない。日本語はわからないくとも「がんばれ」という単語は言えるようになった。歴史や外交、経済、あらゆる分野で摩擦を起こし、永遠のライバルとして競い合う日韓両国だが、実はかけがえのない仲間になつていただ。

「なぜ募金する気になったのか」と韓国人に尋ねると「津波や地震は日本人のせいじゃないから」とはっきりとした答えが返ってくる。厚い人情に驚いたのは日本人だけではない。韓国人自身も、自分たちが正直、ここまでやるとは思っていないかったようだ。

宗教哲学者の池明觀さんは、東亜日報に「今回のように国を挙げて日本を応援することは有史以来初めてだ。韓国とのこのような動きが、日本にどのような影響を与えるのか見守っている」と、今後の日本の変化に期待を示した。

「われわれが日本に文句を言うのは間違ったことをしたときだけ。被災者には心からお悔やみを申しあげる」とソウルの長老派教会で長老を務める鄭信子さん。困っている隣人を助けるのは人間として当然のこと。韓国社会はこれだけ成熟したのだと誇らしく思う。韓国が名実ともに余裕ある、発展した社会になつたことを証明できたという、韓国人の自信もつながっているようだ。

残念ながら国を挙げた募金活動は、3月末に起きた竹島(韓国名・独島)問題の再浮上で、急速に冷え込んでしまった。福島原発の事故に対する不安感も根強い。一筋縄ではいかないようだが、今回の韓関係が根本的に変化するきっかけになるかもしれない感じている。(阪堂千津子・東京外国语大学講師)

隣人支援する自らに誇り 震災に見る新しい関係

石巻中学校で救護活動をされていた保護者の方より

(写真はありません)

石巻の医師会医療救護所の閉鎖のニュースです。

宮城・石巻の救護所閉所 兵庫県医師会など
(写真は避難所住民から各会長等に花束贈呈の模様)

兵庫県医師会と県看護協会、県薬剤師会は19日、東日本大震災で避難所となつた宮城県石巻市の市立石巻中学校で、3月21日から合同で開設してきた医療救護所を閉所した。約3ヶ月間で医師や看護師、薬剤師ら延べ約300人を派遣。被災した地元診療所の大半が再開したため活動を引き継いだが、同日開かれた閉所式では、これまで頼りにしてきた被災者らが別れを惜しんだ。

救護所は同校の教室を借りて設置し、近隣の避難所なども巡回。兵庫県内から有志のメンバーを交代で派遣し、おおむね5月までは計12人態勢、6月は計5人態勢で活動した。

当初は衛生環境の悪化や寒さから感染症などが多く、患者100人以上が列をつくる日もあった。5月以降は1日に10~20人程度で、高血圧や糖尿病、不眠など慢性疾患の患者が目立つようになった。

閉所式では、同校に避難する被災者が各会の会長に花束を贈呈。会社員(41)は「震災で精神的に参っていた6歳の娘を心配して、看護師さんが夜も見に来てくれた。心強かった」と振り返り、避難中に腰を痛めて診療を受けた無職の女性(65)は「関西弁で冗談を言って笑わせてくれた。寂しくなりますね」と話した。

県看護協会の大森綏子会長は「派遣されたメンバーは、被災者の皆さんのが頑張る姿から逆に力をもらい、人間的にも成長できたと思う」と感謝した。(石崎勝伸、岩崎昂志)
(神戸新聞2011/06/19 21:16)